

故人をしのぶ

須崎民雄先生のお人柄を偲ぶ



ご略歴

昭和32年3月 九州大学農学部林学科卒業
昭和42年5月 農学博士（九州大学）
昭和44年5月 九州大学農学部助教授
昭和50年6月 九州大学熱帯農学研究センタ
～61年3月 一兼任
昭和61年9月 九州大学農学部教授
日本林学会評議員、日本造園学会評議員
日本林学会九州支部幹事

須崎先生が目にされた最後の自然は、六甲森林植物園の全園に広がるあの素晴らしい紫陽花の花であり、雨と霧に煙る六甲山牧場ではなかったかと思います。これらは、先生の最後の旅になった油山整備構想委員会での研修中の一風景であります。その日は早朝から先生と新幹線で一緒に、九州の将来のこと、大学のあり方のこと、食べ物のことなどいつも変わらない調子で楽しい時を過ごしました。また、バスの中では健康管理の話までしておられました。ところが、翌朝の朝食になり、いつも早いはずの先生の姿が見えないことに気付き、とても厭な予感がしました。それが的中したのです。急性心臓死のことでした。御家族のことをいつも考えておられた先生だけに、どうして家でなくこんな旅先で・・・とそんなことをとても強く感じました。もし家でしたら御家族の方が先生の異常にきづかれ、こんなことにはならなかつたの

ではと考えるからです。これは平成2年7月12日の出来事です。享年56歳の若さでした。残念の一語に尽きます。

先生と初めてお会いしたのは随分昔になりますが、本格的に近くお付き合いさせていただくようになったのは小生が九州に赴任した昭和58年頃からであります。それから御逝去されるまでの間、先生とは“アジア太平洋博覧会”や“国際花と緑の博覧会”など多くの仕事を共同でして参りました。先生は、とても学者らしい側面とそうでない側面の両面をお持ちだったように思います。そして、何事に関しても一生懸命、しかも前向きの姿勢で取り組まれる姿がとても印象的でした。時々の委員会などで、考えておられることを熱っぽく語られるのも先生らしい一面でした。そして、人間を愛され、彷彿する知識と豊かな感性で誰にでも語りかけ、多くの人々を魅了されるお人柄でもありました。

言うまでもなく先生は、林学の分野では日本を代表する学者であり、日本林学会の評議員をしておられました。研究面では、樹木生理が御専門で、とりわけ環境的に厳しい乾燥地や海浜砂地などでの造林について研鑽を重ねて来られました。また、一方では、日本造園学会の評議員として活躍され、特に造園植物については深く研究を進めてこられました。最近ではこれら両研究分野の成果を踏まえて“造林学”を“環境造林学”として位置づけ、環境林の造成や都市林の効用などに関して独自性のある新たな研究分野を開発し実践しようとされており、環境分野の多くの人々から

その成果を大いに期待されておられました。また、先生が教えて来られた多くの学生達は、みんな先生を心から慕い林学や造園の分野で広く活躍しておられます。これらのことからも先生の学者としての、また教育者としての誠実な生き方が感じられます。先生は、小学生にとっても大切な先生でありますし、かけがえのない友でもありました。今一度先生とご一緒に何か新しいことに挑戦できたらと願って止みません。

先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(九州芸術工科大学環境設計学科教授、

当協会理事 杉本正美)

